

第21回夏期福音特別集会(1) (伊豆高原)

漁夫ペテロ

——マタイ伝第14章22～32節、ルカ伝第5章1～11節——

1974年8月23日

小池辰雄

シモン・ペテロ 直ちに今ここに 深処に乗りいませ 然れど御言に随いて 自分自身にプロテスト 自己突破 無私の世界 主よ、我は罪ある者なり 懼るな 一切を棄てて 十字架の門 御霊の世界 南無阿弥陀仏 心安かれ、我なり、懼るな 絶対恩寵の世界 行為的クリスチャン 本当の生きがい

【マタイ14】

22 イエス直ちに弟子たちを強いて舟に乗らせ、自ら群衆をかえす間に、彼方の岸に先に往かしむ。23 斯て群衆を去らしめてのち、祈らんとて窃に山に登り、夕になりて独りそこにい給う。24 舟ははや陸より数丁はなれ、風逆うによりて波に難されいたり。25 夜明の四時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給いしに、26 弟子たち其の海の上を歩み給うを見て心さわぎ、変化の者なりと言いて懼れ叫ぶ。27 イエス直ちに彼らに語りて言いたもう『心安かれ、我なり、懼るな』28 ペテロ答えて言う『主よ、もし汝ならば我に命じ、水を踏みて、御許に到らしめ給え』29 『来れ』と言ひ給えば、ペテロ舟より下り、水の上を歩みてイエスの許に往く。30 然るに風を見て懼れ、沈みかかりければ叫びて言う『主よ、我を救いたまえ』31 イエス直ちに御手を伸べ、これを捉えて言ひ給う『ああ信仰うすき者よ、何ぞ疑うか』32 相共に舟に乗りしとき、風やみたり。33 舟に居る者どもイエスを拝して言う『まことに汝は神の子なり』

【ルカ5】

1 群衆おし迫りて神の言を聴きおる時、イエス、ゲネサレの湖のほとりに立ちて、2 渚に二艘の舟の寄せあるを見たもう、漁人は舟をいでて網を洗い居たり。3 イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼に請いて陸より少しく押し出さしめ坐して舟の中より群衆を教えたもう。4 語り終えてシモンに言いたもう『深処に乗りいだし、網を下して漁れ』。5 シモン答えて言う『君よ、われら終夜、労したるに何をも得ざりき、然れど御言に随いて網を下さん』。6 斯て然せしに魚のおびたしい群を囲みて網裂けかかりたれば、7 他の一艘



の舟における組の者を差招きて来り助けしむ。来りて魚を二艘の舟に満たしたれば、舟沈まんばかりになりぬ。8 シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下に平伏して言う『主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり』。9 これはシモンも偕に居る者もみな漁りし魚のおびただしきに驚きたるなり。10 ゼベダイの子にしてシモンの侶なるヤコブもヨハネも同じく驚けり。イエス、シモンに言いたもう 11 『懼るな、なんじ今より後、人を漁らん』。かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。

●シモン・ペテロ

ペテロというのは、ギリシヤ語でいえば「ペトロス」ですが、ヘブル語の名前は「シメオン」といいます。ギリシヤ語になると、「シモン」という発音になって、「シモン・ペテロ」という言い方が出てくる。

「シモン」という言い方で字引を引いてみると、マタイ伝には5回、マルコ伝には6回、ルカ伝には11回、ヨハネ伝には22回、使徒行伝には4回出てます。「ケパ」という言い方、これは当時のヘブライ語の方言アラミ語の「ケーファース」という字のギリシヤ語読みであって、「岩」という意味です。

「ペテロ」という言い方で聖書に出てくるのは、これが一番多いので、マタイ伝が23回、マルコ伝が19回、ルカ伝が17回、ヨハネ伝が34回、使徒行伝には46回出てます。その他、書簡にもちよこちよこあります。

ということとは、福音書において、「シモン」とか「ペテロ」とか「シモン・ペテロ」とかという言い方で、いかに多く出ているか。それは要するに、ペテロがいかにキリストと一番関係が深かったかということ、その度数によっても察することができるわけです。

生い立ちの方から少し言いますと、父は「ヨナ」あるいは「ヨハネ」といいますが、ペテロとアンデレが兄弟である。

「バルヨナ・シモンよ」(マタイ16・17、ヨハネ1・42)

という言い方がある。「バル」というのはアラミ語で「息子」という意味で、「ヨナの子」ということを「バルヨナ」という。

彼はどの出かというところ、ガリラヤの東北のベツサイダという所がありますが、多分その出身であるということは、ヨハネ伝1・44によって分かる。彼が何をしていたかということ、言うまでもなく、漁夫、ガリラヤ湖の漁師です(マルコ1・16)。

多分、バプテスマのヨハネの弟子であったらしい、と学者が想像しているわけです。イエスに最初に会ったのは、この召命を受ける少し前であったらしい。洗礼のヨハネがアンデレにイエスのことを、

「神の小羊である」



即ち、「メシヤである」といつて紹介した。そうすると、アンデレがペテロをイエスのもとに連れてきた(ヨハネ6)。ペテロがイエスの直弟子になったのはガリラヤ湖畔である。

●直ちに今ここに

ルカ伝5章よりも、もう少しはつきり出ているのはマルコ伝の1章です。

「14ヨハネの囚れし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣伝えて言い給う、

15『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』(マルコ1・

14～15)

これがキリストの伝道開始の最初の言葉です。

「時は満ちた。神の国は近づいた。もう、そこに来ている。汝ら、心の方向転

換をして、福音を受けとれ」

と。

「16イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンとアンデレとが、海に網

投ちおるを見給う。かれらは漁人なり。17イエス言い給う『われに従いきた

れ、汝等をして人を漁る者とならしめん』18彼ら直ちに網をすてて従えり。

19少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給う、彼ら

も舟にありて網を繕いいたり。20直ちに呼び給えば、父ゼベダイを雇人と

もに舟に遺して従いゆけり。」(マルコ1・16～20)

即ち、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネというのが直弟子になってしまう。実に簡単に直ちということ。マルコ伝というのは「直ちに」という言い方が非常に多いので、私はこれを即福音書と言っている。マルコ伝というのは、非常に行動的に速い。

福音の世界は「即」の世界です。即というのは即ち、

「直ちに、今ここに」

ということ。明日ではない、今である。あそこではない、ここである。今ここに、という即的な受け方をしないと、福音はいつまでたっても本ものにならない、

「そのうちに分かるだろう」

くらいでは。

「聖書が分かる」

という言葉は、実は躓きの言葉です。分かる世界ではない。聖書はドラマ、劇であるので、その劇の中に自分を投げ入れて読む。身体で読む。これは体感する世界です。体というのは全存在ということです。全存在で感得する世界。それは自分が劇中の人物にならなければダメなんです。眺めていたら、研究してたらダメです。眺めることや研究することが悪いとは言いませんけれども、それではいつまでたっても周辺であって、中には入れない。この聖書の現実に入ろうと思ったら、正に全存在で体感体得していく。そういう角度で自



分を投げ入れていかなくはないかん。そうしたらば、いい加減な読み方をして5年、10年やっている人よりも、はるかに

「後なる者は先に」

ということでありませう。

ペテロは、とにかく、キリストにどこまでも従っていきましました。キリストとペテロの家そのものがかなり親しくなりまして——ペテロは、キリストに呼ばれた頃はもうひよつとして奥さんがいたのではないかというわけで——全家でもってイエスを迎えていた。イエスはペテロの家にしぼしば行つて、ある意味では根拠地みたいにしておられたようです。ガリラヤ湖の北の方にカペルナウムという所がありますが、初めのうちは、そこで安息日ごとにユダヤの会堂即ちシナゴグで説教をしておられた。そのうちに、教法師やユダヤ教の連中、祭司たちに憎まれて、会堂で話すことがだんだんむずかしくなつて、野原や山や道端や海辺で——ここでは舟に乗っている——群衆に話すということになつてきた。そういうようなことが大体、聖書を読むと感ぜられるところですよ。

● 深処に乗りいませ

ガリラヤ湖畔に出て、そして、キリストがペテロを召した。その非常に著しい所として、ルカ伝5章にあたることにします。

「群衆おし迫りて神の言を聴きおる時、

「おし迫りて」と言ひましても、群衆は自分の方からおし迫るといふよりも、むしろ、キリストに引きつけられてというわけです。イエスは磁極みたいなひとですから、磁鉄を引きつけるように、群衆は何故か知らないけれども、キリストの方へ寄つてくる。ということとは、既にキリストはいろいろな実績を現していらつしやいますから、彼らは驚いている。

イエス、^{すなわち}ゲネサレの湖のほとりに立ちて、²渚に二艘の舟の寄せあるを見たもう、^{すなわち}漁人は舟をいでて網を洗い居たり。³イエスその一艘なるシモンの舟に乗り、彼に請いて^{おか}陸より少しく押し出さしめ坐して舟の中より群衆を教えたまう。

水際でもう押し出されるしまつですから、舟に乗つた方が話しやすい。

⁴語り終えてシモンに言ひたまふ『^{ふかみ}深処に乗りいだし、^{おろ}網を下して漁れ』。

「深処」といふのは、もちろん深い所という意味と、沖合という意味がある。

「沖合に乗りいませ。網を下して漁れ」

と、いきなり、こういうことを言われる。こういうキリストの言が、いかにも権威がある。理屈から推量して結論したような言葉でなくて、直観的に上から何か来て、そしてこれを語っている。非常にキリストの言葉は簡単で、

「こういう場合にはこうで、ああいう場合にはああだ」



式なことはほとんどおっしやらない。ここでも、問答をしてない。

「どうだい、この頃、採れるかい」

なんて仰ってない。いきなり、

「深みに乗りだして、網を下してすなどれ」

なんて言ったって、これは唐突な話なんだ。

「この男はちよつとおかしいのではないか」

と、普通の人は思うくらいだ。

● 然れど御言に随いて

5 シモン答えて言う『君よ、われら終夜、よもすがら 労したるに何をも得ざりき、然れ

ど御言に随いて網を下さん』。(ルカ5:1～5)

このペテロの答えは非常に注目すべき言葉です。ペテロは、何といったって、専門家です。海の様子をよく分かっている。よもすがら労したけれども、何も得ない。もう全く時化している。

「しけているので、とても深みへ行つたって、これはダメですよ」

と本当は言いたいところなんだ、自分の判断では、普通なら、

「あなたはそんな事をおっしやるけれども、何も得なかつたんだ」

なんて言いたいところだけれども、そこがまたペテロの非常にペテロたるところです。

「然れど御言に随いて網を下さん」

と。ということは、ペテロは、キリストが異常なひとであるということは既に分かっている。

何しろ、群衆が押し迫ってくるようなわけですから、

「この人はちよつと違う」

ということとは薄々分かつている。だから、

「然れど御言に随いて」

と言った。この「然れど」というのはギリシヤ語で「デ」という字ですけれども、この「然れど」が即ち自分をひっくり返しているわけです。自分の考え、自分の経験、自分の過去のいろいろな経験による判断、それを瞬間にして乗り越える。この「されど」というところに信仰がある。ペテロは、その点で、「されど」と言つて自己にプロテストしているわけです。自分にプロテストするということがまず信仰の極めて大事な姿です。

● 自分自身にプロテスト

内村先生の

『アロウン ウィズ ゴッド アンド ミー』

という英文の本がありますが、先生は『聖書の研究』の巻頭にいつも英文を載せて、その



下に先生一流の訳文を載せておられましたが、その中に「プロテスタントイイズム」という文章があります。

「私はプロテスタントである。」

即ち、ルターがカトリックの子でありましたが、彼はローマ法王に対して「然らず」と言っ
て、ローマン・カトリックにプロテスト、反抗したわけです。ルターの流れを汲む、キ
リスト教のいわゆる新教ということ。

プロテスタントの六百以上の教派のどれに対しても、私はプロテストする。また、プ
ロテスタンティズムという名前のもとに行われているところの諸々の主義にプロテス
トする。いや実に、もし私が何らかのイイズムをもっているとするならば、私自身のイ
ズムに対してもプロテストする。」

この内村先生の言葉は、

「もし無教会主義という主義をもっているとするならば、私は無教会主義にも反対
する。」

ということと同じことです。だから、「無教会主義」と言っている連中は実は内村先生の本
当の気持を知らない。もちろん、内村先生は「無教会主義」ということを言いました。け
れども、内村先生は矛盾に満ちた人で、その矛盾をどうやってほごそうかとしたって、こ
れは論理的にはほごせない。けれども、全体の気合からいうと分かる。

一体、真理というものは、同じ平面にもってきて、それを比較してつじつまを合わせよ
うと思っただって、これはダメなんです。本当の真理というものは、そんなことをして掴
めるものでない。聖書そのものがそうです。聖書の言葉は、あちらこちらを探したら、たく
さん矛盾しているものがある。

「これをどうしてくれるんですか」

と。それは、その時その時にのつびきならない角度から、ものが言われている。それを同
じ平面にもってきたって、これはダメなんだ。それが大きな、渾然たる有機体的な構造に
——或はドラマチックな、劇的など言っただ方が一番いい——劇的な構造になっていますか
ら、それを辻褄を合わせようとすることが間違い。その劇的構造をどのようにして本当に
掴めるか、というところには一つの焦点がある。その焦点から見ないと、分からない。

だから、この内村先生の言葉は私は非常に愉快だ。大体、イイズム、主義なんていうもの
で福音は掴めるものではない。「無教会主義」なんていうものには——内村先生が言うまで
もなく——私は反対だ。歴史的には或る相対的な意味はあります。けれども、そんなとこ
ろに執着しているからダメなんです。

「私が信じこんでいるところの福音は次のようなものである。即ち、イエス・キリスト
及び十字架に架けられたる彼である。」

やっぱり内村先生は十字架、一点張りになった。そこにまた、無教会の一種の限界がある。



内村先生は「聖霊」のことを言わないわけではないんだけど、もちろん十字架は土台に相違ない。

私が理解しているところのプロテスタント主義は人為主義に対するところのキリストである。教会に対するところの信仰……

いわゆる教会主義のこと。「教会」「チャーチ」「キルヘ」という言葉は本当は素晴らしい言葉なんです。これは、

「キュリオス、主に属するもの」

という意味です。チャーチとかキルヘというのは、言葉の本来の意味はいい意味です。「主に属するもの、主のもの」という意味です。ところが、主のものでなくて、教会というものが何か制度的になってしまった。制度になったから、これはダメだと。これはブルナーが『教会の誤解』という本を書いてますが、あれによく書いてある。

それはいろいろな複雑なものに対して戦うところの単純性である。死んだ制度に対して反対するところの、生きた有機体的なものである。」

我々の身体がそうです。我々の存在はリビング・オーガニズム(生きた有機体)です。デッド・オーガニゼーションズ(死んだ制度)のような教会がたくさんある。カトリックもその一つだ。全部、死んでいるとは申しませんよ。けれども、制度があると、どうもとかく死んだようなことになってしまう。制度には常にプロテストする。

要するに、プロテスタントというのは、いつも自分自身にプロテストしなければダメなんです。問題は他ではない。我自身にプロテストして常に乗り越えていく。限りなく乗り越えていくのが、本当のプロテスタントイズムで、それが本当の福音の在り方です。

「私は福音を掴んだ」

なんて、そんな思いついたことではいかん。

「私は福音に捕まえられつつ限りなく参ります」

ということですよ。

「これは純福音である」

なんて、よく「純福音」なんてことを言う。嫌になってしまふよ。そんなもので、福音という無限無量の内容が掴めるかというんだ…(異言)…もう私はグッとその瞬間に宇宙的なところに入ると、異言になりそうになる。

●自己突破

そういうのが即ち、「されど」なんです。

「されど、私は自分の考えに反対します」

と。正直、ペテロは、これは行き詰まっている。時化て、何も採れない。網は揚げたところ、空っぽだと。とにかく、行き詰まることは、



「幸福なるかな、行き詰まれる者よ」

です。「幸福なるかな、満つる者よ」ではない。

「幸福なるかな、八方塞がりの者よ」

と。八方塞がりは何故幸いですか。

「行く所がなくて、困ったではないか」

と。少しも困らない。上を見てください。天界が開けている。天が開けている。イザヤも言っている。

「天よ、開けよ。天よ、裂けて、聖霊臨み給え」

と。天を仰げば、ここは開かれている。横は塞がっているけれども、そんなものは一向差し支えない。横が開いているものだから、いい気になって、横へばかり伸びていく。そして、上へは伸びない。むしろ、塞がって、

「もう、私は行き詰まってしまって、どうにもなりません。私の行くところはこの

縦の次元です」

と。この高次元の世界。もう一つ言えば、絶対次元の世界です。この絶対次元の世界に自分を向ける。相対界において絶えることが、絶対界に開かれる門なんです。門は天に向かつて開いている。だから、自分に、また世の中に絶望していいですよ。その代わり、自殺してはいかん。絶望したら、今度は上を見てください。そうしたら、豁然として、絶対次元高次元の世界が開かれてくる。

キリストはそれを与えようとして、ペテロにかかったんです。いい加減のことで、世の中がうまくいって、

「めでたしめでたし」

なんていうのは、少しもめでたくはない。そんなのは少しも幸福ではない。むしろ、行き詰まると、今度は無限に開かれてくる。

皆さんは、そのためにここへやって来たんだと思う。いいですよ、相対的な世界がどうであろうと。「わが望みは消えゆくとも」だ。

「わが望みは消えゆけ、あなたの本願が私を貫いてください。そうしたら、私は行くとして適わざるなし」

と。横がどう塞がっているようが、みなこれを突破してしまうから。今度は、八方破れではなくて、八方破りになる。八方を破ってしまう。突破してしまう。突破の力は上からきます。本当ですよ、これは。

ペテロにはまだ聖霊はきていません。けれども、相手はキリストです。相手は神の霊人でありますので、このキリストに、

「あなたがおっしゃるのだから、文句はありません」

と言って、自分を蹴飛ばしてしまった。自分を突き破ってしまった。自分を突破した。自



己突破した。「されど」というのは自己突破なんです。

人はこの世の常識や医学上の判断やいろいろなことで判断します。けれども、この福音を受けたならば、どうぞそんなものは突破してください。そのようなところを突破することができないようなものが福音ですか。それなら、普通の哲学でいい。あるいは文学でいいけれども、福音は不可能を可能にするところの世界です。行き詰まりを突破させるところの世界です。

私みたいなこんな者に、どうして力が来るかというのと、それが来るから仕方がない。止むを得ざるなりということ。私たちは決して行き詰まらない。キリストにあつては、どのような所でも行き詰まらない。絶すると、反って凄いことになっていく。

● 無私の世界

キリストの言葉は空言でない。

「**深処に乗りいだして網を下して漁れ**」

というのは、ちゃんと、キリストは先が見えている。中身が見えている。何と凄い人でしょうね。望遠鏡で見たのでも何でもありません。何か、光をそこへ照らしたのでも、サーチライトでもない。ちゃんと、そこで見えている。非常に明察というか、靈察のひとです。聖霊でちゃんと察知してしまう。或は靈知といつてもいい。神との祈りの世界が深くなると、見えてくる。キリストは最高の靈能を神様からいただいたいらつしやるから、靈知することも、甦りの力もある。

この世の判断に負けてはいかん。それは自分でただ無理をしたっていかん、

「そうか、それではやってみようか」

なんて。自分に本当に絶して、キリストに本当につけば、確信ならざる確信が湧いてくる。そうしたら、もう勝ちます。人から聞いて、ただ「それではやってみようか」なんていうことだったら、怪我しますよ。それは自分に絶してイエス・キリストに本当につくことです。

「**6** 斯て然せしに魚のおびただし群を囲みて網裂けかかりたれば、**7** 他の一艘の舟における組の者を差招きて来り助けしむ。来りて魚を二艘の舟に満たしたれば、舟沈まんばかりになりぬ。

大変な漁です。うそみたいな事だね、本当に。

8 シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下に平伏して言う『主よ、我を去り

たまえ、我は罪ある者なり。』(ルカ5:6～8)

「イエスの膝下に平伏して」という、この姿が大事です。我々は、信ずるときには平伏しの魂でなければダメです。

「私は信仰があるから」

なんて、そんな気持ちで信じたってダメだ。平伏しなんだ。信ずるといふのは相手を100%に



受けとるということですから。

「90%は受けとるが、10%はこっちにもあるよ」

なんてのはひとつも信仰ではない。100か0。0が平伏しなんです。

イエス・キリストがそういうひとです。イエス・キリストが最高の平伏しの方です。父なる神の前に本当に平伏した。自分の霊力なんてものを思ったことがない。サタンとの一騎打を見てごらんなきい。彼は自分の霊力で勝つてない。いつも、父を見ている。父の前に平伏している。それでサタンに勝っている。

このゼロというのが無です。私が無い無心。我というものが無い世界です。無私と言おうが、無我と言おうがいい。

「一体、我がないとはどういうことですか」

なんて、論理的にすぐ考える。

「あるじゃないですか、我が無いということが一体ありますか」

なんて。そういうサイコロジカルな考え方をする。あの心理学というのは止した方がいい。心理学をやっていると信仰からぬけてしまう。心理学だの宗教学だのは現象ばかりを比較しているから。

無私という世界に入ってください。これが一番楽なんですから。

「何かであらねばならない」

なんていうことではないから、こんな楽なことはない。無私と言うと、

「何かひとつ、思い澄まそう」

と思ってもいかん。あるがままでいい。あるがままを投げ出すと、無私の世界に入る。あるがままをキリストに投げ出すと、この無私の世界に入る。

●主よ、我は罪ある者なり

キリストは、

「お前たち、祈る時に、天にまします我らの父よ……と祈れ」

と仰った。「父よ」と祈ってもいいですよ、

「天のお父さま」

と。けれども、キリストはああ仰ったけれども、今度は、キリストが天界に行ってしまったら、キリストは神さまの出店でみせですから——私たちには神さまは分からないんだ——祈る相手はキリストというはつきりとした私たちの救主すくいぬしです。だから、私は

「主よ」

と申し上げる。「主よ」の奥にはもう「父よ」がある。「父よ」の手前には「主よ」がある。この「父よ」と「主よ」は離れたらダメです。よく教会の人から聞かれる。

『主よ』と言っておいて、そして『主の聖名みなによって』と言うのはちよつとおか



しいではないですか。『父よ』なら『主の聖名によつて』は分かるけれども、『主よ』と祈つておいて、今度は『主の聖名によつて』とはどういうことですか」

なんて。「どういうことですか」もヘツタクレもない。そういう妙な論理でもつて考えているから、いつまでたつても始まらない。「主よ」と言おうが「父よ」と言おうが一如なんです。

「御霊さま」

と言つたつていい。そういうものをバラバラにしているから、いつまでたつてもいかん。それが、さっきのオルガン、有機体なんです。

「8シモン・ペテロ之を見て、イエスの膝下に平伏して言う『主よ、我を去り

たまえ、我は罪ある者なり。』」(ルカ5:8)

まあ、これはこう言つたつて、仕方がない。正直、そうなんだから。これは間違ひではない。

「とても、あなたをまともに見えない奴なんです。申し訳ない奴なんで、どうぞ、

ここから去つてください」

と。それはペテロらしい言い方です。これは本当に畏れかしこんでいる。

「恐がる」ではない。「畏れる」です。今の口語訳聖書に

「神を恐れ」

なんて書いてある。箴言の1章7節に、

「神を恐ることは知識の始めなり」

と。恐がるのは知識の始めにはならない。畏れかしこまなければいかん。

けれども、キリストは、

「もし、私が去つたらお前は一体どうなるんだ。お前を助けようとしてやつて来る

のに、我を去りたまえとは」

と仰います。畏れかしこむことはいいが、「我を去りたまえ」は余計だった。

「主よ、我は罪あるものなり。どうも申し訳ありません」

と、それだけならいい。

「私は申し訳ないやつです。どうにかしてください」

と言うんだ、本当は。どうにかしてくださいと言って、申し訳なくて平伏す。平伏しながら、しがつく。あれがそうだったではないですか。あの罪ある女がキリストの所へ来て、涙で拭つて、キリストの足に接吻した。あれが本当の姿です。

● 懼るな

あまりキリストがケタ違いの方であるので、驚いたわけでは

「これはシモンも偕に居る者もみな漁りし魚のおびただしきに驚きたるなり。」

「あなたは到底ケタ違いな人間で、こんな私たちはもう勝負にならない」というわけです。



10ゼベダイの子にしてシモンの侶ともなるヤコブもヨハネも同じく驚けり。
それはそうに相違ない。時化しけだと思つていたところが、大漁になってしまったから。

イエス、シモンに言いたもう『おそ懼るな

この「懼るな」という言葉が福音書によく出てきます。これは正に

「恐がるな、恐がることはない」

ということですよ。もう少し積極的に言うと、

「安心しろ、心を安んぜよ」

ということ、「シャーローム」です。

なんじ今より後、人を漁すなごらん』

「私に従うなら、私について来るなら、私を受けとるならば、人を漁ることになるぞ」
もちろん、手放しで人を漁れません。大漁は、即ち、

「このように大漁が採れたように、今に、多くの人を網の中に入れることになるぞ」という、そのための徴です。凄いね、キリストというひとは。

「あのペテロをひとつ、福音の器にするぞ」

と、キリストはそのために神さまにちゃんとその徴を祈っているんだ。そして、大漁になるわけだ。彼らはまだその本当の徴が見えていない。ただ、びっくりしているだけだ。

「お前たちは、ただびっくりばかりしたってダメだ。こわがってもダメだ。心やす

かれ。安心しろ。喜べ。今から人を漁すなごることにするぞ」

と。キリストは、その後で「喜べ」とおっしゃらなくても、キリストの中にはそういう言葉があつたはずですよ。

●一切を棄てて

かれら舟を陸につけ、一切を棄ててイエスに従えり。(ルカ5:9、11)

凄いですね。「一切を棄てて」というのは、何か棄てるということではない。全生活ぜんせいごうをあげて、ということですよ。全生活をあげてキリストに従う。

あなた方はいろいろな職業についている。その職業を「自分の職業だ」なんて思つてはいかん。

「儲かるの、儲からないの」

と、何を言うか。商売でも何でも、

「一切は神の栄光が現れるために」

と、それが一切を棄ててということですよ。自分のものではない。お金が儲かったら、神さまのこのために使えばいい。皆さんが献金なさる。私はそれを袋に入れて、「神有」と書いてある。私しませんから。

「全生活をあげて」ということが「一切を棄てて」ということです。或る時は、本当にそ



の職業を棄てることもある。けれども、その現象面ではなくて、生活そのものの在り方が神さまに向かつて、私事とはしない。全部一切は神にということです。

そういうことで、彼らは一切を棄ててイエスに従った。何をしても、神さま本位で一切をあげて行う。それが一切を棄ててということ。時には本当にそれを棄てなければならぬ時もあるでしょう。それはその人その人のつぴきならない在り方があるわけです。

「一切を棄ててイエスに従えり」

ということの一切を棄てての気合が分かりましたか。

「私は何をしても、これは神さまのため、福音のため、キリストのためだ。一

つも私してはいないぞ」

という、その気合で生きてくださいよ。そうしたら、力が出ますから。そうでなくて、何か相対的な気持でやったら、絶対にダメです。もうはつきりしています。

このルカ伝5章の1節から11節の事態を、やはり皆さん一人ひとり、ペテロとなって、キリストに本当にこのようにしてでつくわして、そして、

「お前を使うぞ」

と言われる。何をしていらつしゃつても、女の方でも、みな本当の伝道者ですよ。何も壇上でしゃべるのが伝道ではない。ひとりの苦しんでいる人、病める人に、あなた方は祈ったら、按手してあげなさい。悲しめる人、求める人に膝つきあわせてお話をする。

「私にはお話ができません」

ではありませんよ、御霊が来ていれば。

ペテロは、

「主よ、我を去りたまえ、我は罪ある者なり」

と言ったが、罪ある者こそキリストは迎えようとしている。どうにもならない者をこそ、キリストは神の国の土台にしようとしている。この世でどうにかなっている者は、キリストは要らないんだ。

「病める者を要する。罪びとを要する。学者・パリサイ人・教法師は私の敵だ」

と言う。だから、キリストは十字架に架けられた。自分を何かと思っている者は、みな落第なんだ、どんなに立派でも。ところが、

「自分は本当に病める者だ」

と言って、キリストに向かつてくる者はみな変質変貌させられていく。ペテロ自身ももの凄く変質変貌をしましたから。

●十字架の門

マタイ伝14章22節から。五千人のパンの徴の、大奇蹟の後です。

22 イエス直ちに弟子たちを強いて舟に乗らせ、自ら群衆をかえす間に、彼



方の岸に先に往かしむ。23斯て群衆を去らしめてのち、

群衆はやつて来てしようがないから。とにかく、群衆というのは半分御利益なんだ。御利益信仰は困るといふわけだ。

祈らんとて^{ひそか}窃に山に登り、夕になりて独りそこに給う。

キリストは夜中、よもすがら祈っている。あなた方、徹夜して祈ったことがありますか。たまにはやつて下さいよ。福音書を祈り心で読みながら、また祈るんです。そうしたら、何とも言えない世界に入る。キリストの祈りは神の中に、神さまの懐の中に入ってしまう。私たちはキリストの懐の中に入るまでの祈りをしないとね。キリストはいきなり神さまの懐に入れます。私たちはいきなり入れないんだ、キリストの懐に。そこには門がある。十字架という門がある。キリストは、

「我は門なり」

と言う。私たちは罪びとです。平伏します。十字架の門の下に平伏す。十字架の下に平伏すと、門が開く。これはもともと開いていると言ってもいい。開かれたる門です。

「これを閉ずる者なし」

と黙示録に書いてある。門なき門、無門の門と言ってもいい。

本来、私たちは神性をもっていた。神の似姿に造られた。けれども、神から離れたから、切れてしまった。神性がどこかへ行ってしまった。「パラダイス・ロスト」(樂園喪失)ということになってしまった。本当は「ゴッド・ロスト」(神喪失)なんだ。神を失った。20世紀はゴッド・ロストの世界だから危ない。このままでいくと、ノストラダムスの予言が当たるかも知れない。本当に八方塞がりです。地上に望みはない。望みなき世界です。

しかし、本当の望みは上から来る。本当の希望は上から来ます。そうでないのは願望という。「信・望・愛」という、この望は上から来る。神の望なんです。神さまの望みは必ず成る、神さまの望みだから。その神さまの望を戴くことが本当の希望なんだ。これは本願なんだ。

「お前は、そんなダメなやつか。よし、だから、私はお前を迎えようとしているんだ」

と、キリストはおっしゃる。ダメでなければ要らない。だから、ありがたいではないですか。キリストは私たちをこの十字架で、

「私はお前の自我というものを、我というものを全部すつとばして、全部引き受けた。我執は全部引き受けた」

とおっしゃる。人間は生まれつきみな我執者です。我執があるから、これを「罪びと」と言う。この罪あの罪ではない。

「この我執はみんな私が引き受けた」

というのが十字架ですから。十字架がなければ、私たちの我執はどうにもならない。これはキリストが全部引き受けてくださる。



●御霊の世界

キリストの大慈大悲は、お釈迦さんの大慈大悲よりも凄い。お釈迦さんの大慈大悲もありがたいけれども、キリストの大慈大悲は、我執を本当に引き受けて、全部ご破算にして、そして今度は、もの凄いものを与える。その内容は聖霊です。キリストの霊です。十字架の門の中に入ると、キリストは聖霊の満ちた世界ですから、祈りの世界で御霊の世界に入る。祈りでキリストの懐に入るといふことは、本当に御霊の世界に入ることです。

霊界にキリストは生きている。霊界と言ったって、空間的に

「どこまでが霊界で、どこまでが現世か」

なんて、そうではない。霊界は私たちの中までしみ込んでいますから。天地一如の世界です。

キリストは神さまの中に完全に自分を入れてしまったから、その世界は物理法則を越えてしまう。キリストはよもすがら祈って、完全に神の中に入ってしまった。沈黙しながら、雄叫びの世界です。祈りは黙って祈っているけれども、もの凄い。

皆さん、嵐が吹いてきたら、大自然は素晴らしいから、その嵐の呼吸に自分もまた成ってごらんさい。

「嵐は恐いな」

ではダメだ。

「懼るな、嵐に親しめ」

ということ。私は嵐が好きだ。嵐(台風)というのはみな回転です。回転しながら進んでいる。中心は非常に静かなんだ。嵐の目は無の世界、無風の世界です。嵐の目は無風でありながら、もの凄いものを回転させる。無即無限無量の力をもっている。嵐を瞑想すると、そういうことになる。

我々の生活の姿はある一つの焦点をもつ。その焦点は、無でありながら無限をもつところの聖霊なんです。聖霊の世界です。聖霊を中心にして展開していく。何がその人の課題であるかは、その一番中心の課題がここのところに来る。そうすると、その課題を中心にして展開する。これが神の栄光を現すことになる。

私たちはキリストの十字架ですつとばされたから、その中に楽に入る。相対的な自分はどうであろうと、そんなことは問題でない。あるがままで入れるのは、十字架によっているから。そうすると、中に入ると、今度は聖霊によつてももの凄い変化が始まる。聖霊が満ちてきますから。

●南無阿弥陀仏

「南無阿弥陀仏」

というのを知っているかい。



「それは仏教でしょ」

なんて。仏教かもしれないよ。「南無」というのは帰一、帰入することです。「阿弥陀」というのは無量寿、無量光ということですよ。「仏」は覚者、霊界を悟っている者。

「無量寿無量光の覚者に帰一する」

ということですよ。

永遠の生命をもち永遠の光をもっている覚者とはキリストではないですか。キリストに帰一する。「南無阿弥陀仏」とはキリスト教の祈りだったと。

我々クリスチャンの祈りに「南無阿弥陀仏」を称える。

「お前は仏教に変わったか」

なんて、そうじゃないよ。キリストを「南無阿弥陀仏」として祈ることができる。これは大変なことですよ。それだけの掴まえ方を福音はできる。

福音の世界は、仏教であろうと何教であろうと、およそインチキでなければ全部包含してしまう。イエス・キリストというひとは宇宙大の方である。キリストというひとを何故、何かケチくさいことにしてしまおうんでしょうね。とんでもない。

「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。イエスの言葉とその実存はケタ違いです。どうして、福音書に来て、みんな降参しないんですか。

「これは何だろう。そんなことはあるだろうか」

なんて言っていたら、百年たつても絶対に信仰に入れない。キリストに降参しなければ、この世界に入れない。ペテロの如くに平伏さなければダメだ。そうしたらば、

「心配するな、私はお前を要するんだ」

と、破れ器の皆さん一人びとりを本当にキリストは要している。

「神さまは私をどうしてこんなふうに造つたんだろうか」

なんて、ひがんだことをなぜ思うか。そんなことは一つもない。みんな一人びとりは天下一品に掛け替えのないものに造られているということ、なぜ、キリストにおいて自覚しないか。驚くべきことが起きる。もう、信仰となったら、それだけのぶ厚さと無限性、無量性をもって受けとらなかつたら、つまらないですよ。そこらのいい加減な信仰をやっているくらいなら、無いほうがいいくらいなものだ。

私に言わせれば、

「無即全」

無は即ち全である。

「すべてか然らずんば無か」

ではない。

福音をいただくと、相手がドストエフスキーであろうが、ゲーテであろうが、ダンテで



あろうが、みんな掴めますから。あの偉大なゲートルも、

「キリストの前には無条件に平伏す」

と言った。『エッカーマンとの対話』の最後の所を見てごらん。ゲートルは死ぬ二週間前にそのことをはつきり言っているから。ナポレオンも、セントヘレナで、

「福音書は本ではなかった。活物いきものであった」

と言って、最後に彼は驚いた。

どんなものが来たって、絶対にキリストにはかないません。それは神さまを受けとっているんだから。その彼は、

「自分は何もできない。何も言えない」

と言っている。これが本当に信仰の秘訣なんです。そうしたならば、

「求めよ、さらば与えられん」

と、本当に与えられる。そのためには、あなた方はいい加減な妥協をやめて、戦ってくださいよ。本当の戦いは相手を救ってしまふことなんだから。本当の勝利者は、相手をぶっ倒すことではない。

私みたいな生まれつきの臆病者の泣き虫が、何故こういうことになったか、自分でも分からない。皆さんの方がよっぽと強虫で、胆玉も大きい。私はこの中で一番臆病者の弱虫なんだ。それを、「よしー」というわけで、神さまが捕まえてしまったわけだ。

●心安かれ、我なり、懼るな

²³斯て群衆を去らしめてのち、祈らんとてひそかに山に登り、夕になりて独りそ

こにい給う。²⁴舟ははや陸より数丁はなれ、風逆うによりて波に難なやまされいたり。

²⁵夜明の四時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給いに、²⁶弟子たち

其の海の上を歩み給うを見て心さわぎ、変化へんげの者なりと言いて懼おそれ叫ぶ。

その通り書いてある。目に見えるようだ。これは物理法則を越えてしまった。霊的法則の世界です。霊法の世界で、キリストは海の上を渡ってきた。キリストは、なにも波の上を踏んではいませんよ。踏まなくなつて、スーッと行くわけだ。私は少しも霊的な男ではないけれども、こういうのはパッと受けとれる。

「もう、キリストみたいな方はそうでしょう」

と。文句ないです。牧師さんや神学者は本当に受けとつてないようですよ。

「聖書に書いてあるから、仕方がない」

と思って読んでいる。そんなのはダメです。「仕方がない」なんていうのでは。まだ聖書は表現しきれないで困っているんだ、呻いているんだから。文字の奥の響きが読めてこないとダメです。

²⁷イエス直ちに彼らに語りて言いたもう『心安かれ、我なり、懼おそるな』



「何をお前たちは恐れ叫ぶか」

と。ここでも「懼るな」と仰つた。この場合の「心安かれ」というのは「シャーローム」という言葉ではない。むしろ

「元氣を出せ、氣をとりなおせ」

ということですよ。

「氣をしつかりしろ。私だよ、恐がることはない。化け物でも幽霊でもないぞ」と。

28 ペテロ答えて言う『主よ、もし汝ならば我に命じ、水を踏みて、御許に到

らしめ給え』

ペテロというのは面白い。「あなたでしたか」というわけだ。「もし、汝ならば」とは、ただ仮定で言っているのではない。

「あなたでしたか。それでは、水を踏んで御許に行かしてください」

と。それだけの気合をもっていたから、キリストは、

「それでは、こつちへ来なさい」

と。ペテロはこのキリストの言葉に本当に食いついていきますから、

29 『来れ』^{きた} と言い給えば、ペテロ舟より下り、水の上を歩みてイエスの許に

往く。

これは素晴らしい。ペテロの信は素晴らしい信です。キリストの力がかかっているけれども、もちろん、信というのは、信仰が力がある。キリストを受けとることが100%であったから、キリストの力が作用しているわけです。キリストの力が作用していたんだけど、そこまでは良かったが、今度は、

30 ^{しか} 然るに風を見て恐れ、沈みかかりければ

横を見たな。それはダメだ。分裂した。ドイツ語の「疑う(ツヴァイフェルン)」という字は「二つになる」という字です。心が二つに分かれる、「心が二分する」ことを「疑う」と言う。疑ってしまった。心が分裂してしまった。この分裂心はダメです。それだから、沈みかかることはもう当然です。それで、SOSというわけで、

叫びて言う『主よ、我を救いたまえ』

それも正直に言った。

「主さま、どうにもなりません。助けて！」

というわけだ。

31 イエス直ちに御手を伸べ、これを捉えて言い給う『ああ信仰うすき者よ、

何ぞ疑うか』³² 相共に舟に乗りしとき、風やみたり。³³ 舟に居る者どもイエス

を拜して言う『まことに汝は神の子なり』

これは何もペテロばかりでない。我々はしょっちゅうそうです。

「ああ信仰うすき者よ、何ぞ疑うか」



「何ぞ、従来のような常識やなんかで判断するか。人々の声を聞いて、どうのこうのと自分の気持を動かすか」と。

●絶対恩寵の世界

「汝、心を尽くし精神を尽くし思いを尽くし力を尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

というのは、

「全的に、分裂なく、全存在をもつて神を愛する」

ということと。「神を愛する」ということと「神を信ずる」ということは同じです。キリストを受けとるということは、信と愛は同じこと。

「もう、キリストでなければやりきれん。素晴らしいなあ」

と。いろいろなことで行き詰まったり、悲しかったりしたら、キリストの所に来なさいよ。満ちあふれるものに、キリストの愛に圧倒される。私みたいな人間は、それでなければ、もうもたないね。キリストに圧倒されなければ。このキリストの愛に圧倒されることを感ずることが、同時に愛することになるし、同時に信ずることになる。

福音書のキリストに来て、そこに本当に驚嘆し驚倒し、圧倒され、

「参りました!」

と平伏す。キリストはどこまでも、このダメな者を捕まえてくださる。これほど有難いこととはない。絶対恩寵の世界だから。恵信一如なんです。キリストそのものが恵みですから。何か、恵を与えるのではない。キリストそのものが恵だから、「キリストを受けとる」ことが、最大の恵を受けとることなんです。「キリストを受けとる」ことが即ち信なんだ。だから、恵信一如なんです。エペソ書に書いてある。

「恩恵により信仰により救われたり」

と書いてある。あれは大事な句です。「恩恵により」が先です。

二千年前のキリストではありません。二千年前のその事実は、今、我々に向かっていつも活ける事実として私たちに展開している。聖書は過去の歴史を語っているのではない。活ける現実を私たちに投げかけている。古典として研究したって、どうにもならん。いかなる哲学も文学も何もかもが与えることのできないものをこの聖書が与えている。聖書というのは勿体ぶった本でも何でもない。どうぞ、もし妙な先入観があったら、そんなものは本当につき破っていただかないと。

ペテロのこの事態は、ゲートルも大好きだった。

「ここに信仰の奥義がある」

と言っている。人間だから、うろたえたり何かすることはある。けれども、この一句は忘れないでほしい。



「心配するな、私だよ。こわがるな」

という、キリストのこの一句。いつも、これを直かに聞くようにしてください。

「自分をのり越えろ。人の言葉を気にするな。いわゆる科学ではないぞ。もっと深い本当の現実、これが神さまの生命の、神さまの真理の世界である」

と。行き詰まりませんよ、本当に。

「**為んかた尽くれども、望みを失わず**」

と、あのパウロの熾んな信仰はどこから来ているか。キリストが本当に彼の中に内住していたから。私たち一人びとりに本当にそれができるんです。

「パウロさんだからできたでしょう」

ではない。皆さん一人びとりができる。そうしたら、困っている人を、行き詰まっている人を、本当に助けてあげてください。女の方でも誰でもみんなできます。

「私は今年のうちにもどうしてもそういう人を一人救いたいと思います」

と言って、祈っていきなさい。必ず、神さまはさせてくださるから。その祈りをもち、その悲願をもって生きていないならば、キリストチャンであることを止めたらいい。自分だけ救われて、ノホホンなんてのはダメだ。

● 行為的クリスチャン

ゲーテが『ファウスト』の中で、

「初めに言葉ありではない。初めに行為ありだ」

と、訳し変えさせたあの気持は――神さまは行為をもって始めた。出エジプトもそうです。出エジプトという行為を与えて、それから十誠を与えている――

「我々はこれからは行為的クリスチャンでなければダメだ」

ということなんです。

けれども、私は行為と言ったって、何も、今言った信よりも行為の方が大事だ、と言っているのではない。その信が本ものならば即行である。これはイコールなんです。キリストを受けとったら、動かざるを得ない。キリストを受けとったら、福音は生き物だから、

「何か知らんが、私はこの頃、人を救いたくしてしようがない。語りたくてしようがない」

というのが本ものです。

「ちよつとまだ信仰が浅いから、もう少し遠慮しておきましょう」

なんてのはダメだ、いつまでたっても。ということは、どこかの新興宗教みたいに、しつこく行って何のかんのと、そういうのとは違う。

本当の喜びというのは、人に喜びを与えている、人を喜ばしているときです。人がこの福音の世界に入るのを見ることほど私はうれしいことはない。私の生きがいはそのにある。



皆さんの生きがいもそこにあるはずなんだ。

さきほどの、漁りの所と、この湖上のイエス。要するに、私はペテロを語っているのではない。ペテロにいかにかにキリストが向かわれたか。また、ペテロはいかにかにキリストに捕らえられたか。そこを私たちは見ているわけです。ペテロにおいてキリストを見なかつたら、キリストを捕まえなければ、あるいはキリストに捕まえられなかつたら、しょうがない。この湖上を渉るようなキリストを本当に受けとつていけば、私たちにも質的にはそのような現実に入れるんです。

本当にキリストを受けとつてごらんなさい。どんな問題も、知らない間に勝つから。今までどうだこうだと言つて、いろいろ工作して考えて、行き詰まつて、結局どうのこうのと、いつまでたつてもガタガタしている。ダメだよ、それは。そうでなくて、キリストをひたすら受けとつて、キリストに満たされて、その光を放つてごらん。その力を放つてごらん。勝つから。

「いや、あれにはかなわん。あれは本ものだ」

と。そうすると、問題は知らない間に解決してしまふ。相手が「参つた」ということになる。そして、次第に本体と現象が即の世界になつてくる。

とにかく、いつも大事なものは根源の世界において本当にキリストであること。人間の世は、なかなか現象が伴わないことがあります。しかし、それで躓いたらいかん。地上で遂げられないこともあるかも知れない。いいですよ。必ず、遂げられますから。三日月は必ず満月になりますから。その人が仆れると、その後から、その人の念願が念願以上に聞かれていくから。

● 本当の生きがい

じりじりと、そのように本当の意味における——「人造り」と言うけれども、人が人をつくるわけではないが——本当の人造りをしていく。「人間形成」なんて言つたつて、教育で人間形成なんかできやしない。本当の教育は福音を受けとらなければできない。

棄身の気合でいきましょう。この世界は、殊に日本は、いろんな現象を見ると、情けない。ヨーロッパの国にはもちろんかなわないし、お隣の中国にもかなわない。あそこにはドロボーがいらないと言う。とにかく、日本は本当に情けない国です。

吉田松陰が既に、今の世の中のために嘆いているような言葉がある。

「如何ぞ今の世運。大道、糜爛に属す」

大道が失われて、くされただれている。何たる世の中か、と嘆いている。

「世事三つべからず」

と書いてある。世の中のこととはもう言うに堪えないと。そういう世の中ですから。しかし、私たちはこの福音を受けたら、本当に生きがいがある。こんな生きがいがあることはない。



世の中がどうなっても、神さまの国は必ず来る。何となれば、我々の中に来てから。それだけの強烈な信の世界に、信即現の世界に入らないでは、生きがいが無い。地上はせいぜい百年でおしまいだ。これからあと七、八十年たったなら、みんな向こう側だ。向こう側で楽しくやろうと思うんだけれども。

しかし、向こうへ行くと、聖書もないよ。よく覚えておかないとダメだよ。向こうで集会しようと思つたつて、聖書も持つて行くわけにいかない。

「この聖書だけは持つて行きましょう」

なんて言つてもダメだから。みな、素手だから。聖霊と御言はしつかり携えて行かないと。そのためによくやつてくださいよ。それから、本当に人を助けないというと、人を助けたことのない人は、

「ちよつと、どつこい(待つて)」

ということだ。

「天国に私はもう行ける」

なんて思つたら、神さまに、

「ちよつと待つて、お前は一人も助けなかった」

なんて言われてしまう。

このペテロのダメさ加減は結構ですが、キリストがいかにこのダメな者を捕まえて、本ものにしてよいかと思つているか。そして、キリストの次元を同時に私たちがいただく。そういう事態であるということをつかまえないければ。

「キリストは素晴らしいが、私はダメだ」

ではない。そのキリストの素晴らしい次元に、私たちは入れられる。これが聖霊の世界です。それを使徒たちがやつているんだから。そういう意味において、この二つの事態、

「お前たちを漁り人にする」

という、私たち一人びとりが人を漁るところの人にされていく。また、

「湖上をも渡る」

ような人にされていく。ペテロは始めは行けた。風を見て沈みかけたけれども、風を見なければ行けたんだ。だから、それだけの可能性は既にあるんだ。我々も本当にキリストを受けとれば、水をも渡るようなことになつていくわけだ。

イエスの現実、何もただ不思議な事を求めるのではない。人生の波風を本当に渡つて行く。水火をも辞しないで渡つて行くというのは、このキリストの力による。また、本当に人を救つていく。この二つの事態を、ドラマチックなお話から直に受けとつて、明日に進んでいきましよう。

